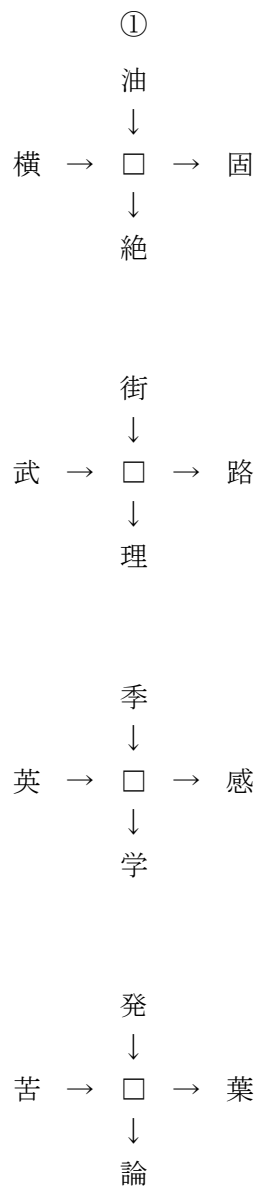




次の問いに答えなさい。(二十点)

問 次の□に縦・横で矢印の順に二字熟語がそれぞれ成立するように漢字を当てはめ、それらの漢字を用いて四字熟語を作りなさい。



問 次の□に「非・不・無・未」のいずれかを入れなさい。ただし、同じ漢字を二度以上使ってはいけません。

- ② □確認
- ③ □条件
- ④ □日常
- ⑤ □規則

問 次のそれぞれの意味に合うように、後の「」の漢字を組み合わせるに二字熟語を作りなさい。ただし、同じ漢字を二度以上使ってはいけません。

- ⑥ 二種類以上のものを混ぜあわせること
  - ⑦ 家族や親類のこと
  - ⑧ 二つのものを見くらべること
- 「内 整 照 調 象 節 期 合 身 対」

問 次のことわざと似た意味のものを、後の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ⑨ 弘法こうぼうも筆のあやまり
  - ⑩ のれんに腕押しうでお
  - ⑪ 藪やぶから棒ぼう
- ア ぬかにくぎ      イ 河童かわづむらの川流れ      ウ 立て板に水      エ 弱り目にたたり目      オ うそから出たまこと
- カ 棚たなからぼたもち      キ 寝耳ねみみに水

問 次の言葉の本来の意味を、それぞれ下から一つ選び、記号で答えなさい。

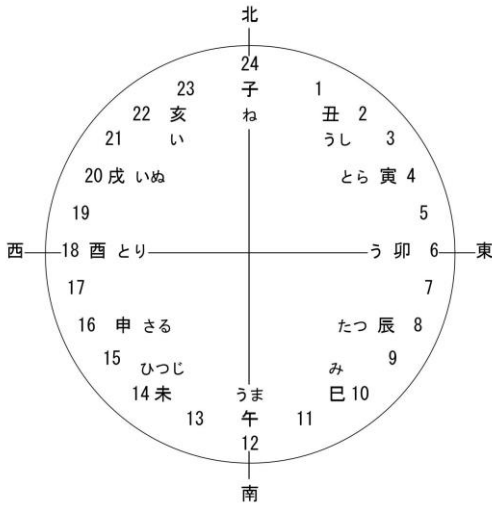
- ⑫ いささか 「ア いきなり イ ほんのわずか」
- ⑬ おもむろに 「ア ゆっくりと イ 思いがけず」
- ⑭ 気を回す 「ア 余計なことまで心配する イ 相手のことや状況を考えて行動する」
- ⑮ 呼び水 「ア 物事が起こるきざし イ 引き起こすきっかけ」
- ⑯ 対岸の火事 「ア 自分のいましめとなる物事 イ 自分とは関係のない物事」

問 昔の人は時刻や方角を表すのに、干支えとを使っていました。図Aはそれを図示したものです。図Aを参考にして、以下の問いに答えなさい。

⑰ 時刻を表すときに、なぜ「午前」「午後」という言葉を使うのですか、説明しなさい。

⑱ 「鬼門きもん」とは、「避けた方がよいとされる北東の方角のこと」を言いますが、そのことと図Bのように鬼おにが描かれることとの関連を説明しなさい。

図A



図B



二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五十点)

親ばかりでなく、同年代の友だちでさえわかり合えない。考え方が違う。感受性が違う。価値観が違う。だから、求めるものが違うし、大切に思うことが違う。こだわるところが違う。

周囲を見回しても、自分と違う雰囲気ふんいきの友だちばかり。ちょっとしたやりとりの中から、さまざまの違いが感じられる。

そんな切り離された人間はなと人間を結びつけてくれるのが言葉だ。自分の思いを少しでもわかってもらいたいと思うとき、僕たちは、わかってもらえそうな相手に自分の思っていることを語る。相手のことをもつとわかりたいと思うとき、僕たちは、その人の語りを引き出そうとする。

言葉というのは、切り離された心と心の橋渡しわたしをする **a** キノウをもつ道具なのだ。この世に言葉があるのは、だれもが切り離された存在だからだ。

ゆえに、さみしさに押し潰つぶされそうなときは、だれかに語りたくなる。でも、考え方も感受性も人それぞれであるため、いくら語り合ってもなかなかわかり合えない。それがまたさみしさを募つらせる。

結局、人間は自分で自分を支えていくしかないのだということに行き着く。そんなときに存在意義を發揮はつきするのが、もう一人の自分だ。もう一人の自分との対話は、しばしば詩や短歌、あるいは小説や随筆ずいひつなど文芸の形を取る。それが読者の心に響くひびのも、だれもが自己の内面をめぐる葛藤かっとうを経験しているからだろう。

\* 萩原朔太郎の「さびしい人格」には、痛いほどの孤独感こどくかんが漂ただよっている。

「さびしい人格が私の友を呼ぶ、

わが見知らぬ友よ、早くきたれ、

ここの古い椅子いすに腰こしをかけて、二人でしづかに話してゐよう、

なにも悲しむことなく、きみと私でしづかな幸福な日をくらさう、

遠い公園のしづかな噴水ふんすいの音をきいて居よう、

(中略)

よにもさびしい私の人格が、

おほきな声で見知らぬ友をよんで居る、

わたしの卑屈な不思議な人格が、

鴉のやうなみずばらしい様子をして、

人気がない冬枯れの椅子の片隅にふるへて居る。」(『萩原朔太郎』へちま日本文学全集、筑摩書房)

もつとも文芸作品を通して自分との対話をするのはごく一部の人たちだろう。より一般的には、日記をつけるといった形を取る。

すでに指摘したように、日記というのは、もう一人の自分との対話の場である。日記こそが唯一自分がホンネを打ち明けられる場だという人もいる。それは、いかにもさみしいことなのか、あるいは救いなのか。いずれにしても、もう一人の自分は、他人ではなく自分の一部なのだから、けつしてわかり合えない相手ではない。

青年期に日記をつける者が多いのには、① そうした事情があるのだ。今は、日記をつけるときのように自分との対話をしながら、ネット上でブログを書く人もいる。

日記をつけたりブログを書いたりしない人も、心の中では、しょっちゅう自分との対話をしているはずである。

僕は、中学生の頃、学校に行くとき自然に道化を演じてしまうようなところがあつて、朝は「今日は、絶対にまじめに過ごさずぞ」と心に誓って登校するのだが、例によって周囲を笑わせたり、悪ふざけをして先生から叱られたりして、帰り道、友だちと別れて一人になると、「またやらかしちゃった」「なんでこうなっちゃうんだ」などと自己嫌悪に陥りながら、「明日こそは、まじめに過ごさないと」などと、自分との対話をしていたのを覚えている。

だれにも言えない心の中の葛藤をめぐって、ああだこうだと思ふ存分やりとりできる相手は、もう一人の自分しかない。

自己意識の高まる青年期は、このように自己との対話が頻繁に行われるようになる時期と言える。

**A**、ずっと自分と向き合っているのもきつい。自分の未熟さ、自分の不安定さ、自己嫌悪、逃れようのない人間存在の個性、孤独感

……。そういったものと絶えず向き合っていたら疲れてしまう。心のエネルギーが消耗する。

B、気晴らしに走るようになる。

音楽に酔う。小説の世界に逃避する。とくに見たいものがないのにテレビをつけ、バラエティ番組などを意味もなく見続ける。友だちとよつちゆう **△** れておしゃべりする。

こうした気晴らしをしている間は、自意識から逃れることができる。人間は、自意識を麻痺させるための、ありとあらゆる道具を開発してきた。

絶えず人と一緒にいないとダメという人、一人でいられないという人もいるが、それは自分と直面するのを避けるためのひとつの戦略と云ってよいだろう。

最近では、本を読む若者が少なくなっているが、その代わりにインターネットの世界に逃避する人が非常に多い。

何もしないでいると、つい自分と向きあってしまう。そこで、暇さえあればスマートフォンをいじり、検索をしたり、SNSをしたり、ゲームをしたり、YouTubeで面白そうな動画を見たりして、自意識が活性化する隙を与えないようにしている。

絶えずだれかと会っていないと落ち着かない人も、不必要にSNSでやりとりしている人も、用もないのに癖のようにインターネットで検索している人も、本人ははつきりと意識していないかもしれないが、**②** 自意識を麻痺させようとしているのだ。

そうでもしないとやっていられない。平常心を保てない。自分と向き合うのは、それほど重たいことなのだ。

大人だってそうだ。アルコールに溺れるのも、**C** シヤコウにうつつを抜かすのも、仕事中毒になるのも、スマートフォンを片時も手放せないのも、自意識を麻痺させるため、自分の内面から目を逸らすためと云ってよい。

自立ということに関連して、個の確立というようなことも言われる。でも、**③** 親からの自立という青年期の課題をはるか昔に達成してしまつた僕でさえ、個として閉じた形で自分が確立されている気がしない。

個の確立などというのは、日本人にとっては無縁のことなのではないだろうか。

子ども時代のように親の管理下に置かれて動くのではなく、青年期になったら自分で考え、自分で判断して動く。それはわかる。しかし、それでも他人の影響は受け続ける。けっして僕たちは、他者に対して閉じられた個として生きているわけではない。

C、僕が親の管理下から離れ、親から自立して動き始めた頃、何が僕の行動原理になっていたのだろうか。思い返してみると、語り合

う友だちや書物を通して出会った作家・思想家・科学者など、僕が共感する人や傾倒する人の価値観を基準に動いていたように思う。親とは違うものの見方や考え方を主張するとき、親以外のだれかが僕の中で動いていた。

結局、僕たちは、個別性を自覚して生きるとはいつても、個として他者から切り離されて生きているわけではない。さまざまな他者の影響を受けながら生きている。さまざまな他者との関係性を生きている。

相手があつて自分がいる。ゆえに、親からの自立というのは、自分で取捨選択しながら親以外の人たちの影響を強く受けるようになっていくことを指すのではないだろうか。

個を生きているのではなく、他者との関係性を生きる僕たち日本人には、他者から独立した自分などというものはない。

そこで僕は、欧米の文化を「自己中心の文化」、日本の文化を「間柄の文化」というように特徴づけている。

「自己中心の文化」とは、自分の言いたいことを何でも主張すればよい、ある事柄を持ち出すかどうか、ある行動を取るかどうかは、自分の意見や立場を基準に判断すべき、とする文化のことである。何ごとも自分自身の考えや立場に従って判断することになる。

欧米の文化は、まさに「自己中心の文化」と言える。そのような文化のもとで自己形成してきた欧米人は、何ごとに関しても他者に影響されず自分を基準に判断し、個として独立しており、他者から切り離されている。

そのような文化においては、他者の影響を受けることは、個が確立していないという意味で④未熟とみなされる。

D、「間柄の文化」とは、一方的な自己主張で人を困らせたりの嫌な思いにさせたりしてはいけない、ある事柄を持ち出すかどうか、ある行動を取るかどうかは、相手の気持ちや立場に配慮して判断すべき、とする文化のことである。何ごとも相手の気持ちや立場に配慮しながら判断することになる。

日本の文化は、まさに「間柄の文化」と言える。そのような文化のもとで自己形成してきた日本人は、何ごとに関しても自分だけを基準とするのではなく他者の気持ちや立場に配慮して判断するのであり、個として閉じておらず、他者に対して開かれている。ゆえに、たえず相手の期待が気になり、できるだけそれに応えようとするのである。

そのような文化においては、他者に配慮できないことは、自分勝手という意味で⑤未熟とみなされる。

「自己中心の文化」においては「他者の影響を受ける」として否定的にみられることを、「間柄の文化」においては「他者に配慮できる」と

いうように肯定的に評価するのである。

そのような「間柄の文化」においては、親からの自立を △ たすためには、親との間柄に代わる重要な間柄が必要となる。関係性を生きる僕たちとしては、何らかの関係性がないと困る。⑥ 自分を動かす行動原理がなくなってしまう。 だからこそ、青年期には、お互いの内面を共有できるような親友を強く求めるのである。

(榎本博明『「さみしさ」の力 孤独と自立の心理学』ちくまプリマー新書)

\*注 萩原朔太郎||詩人(二八八六〜一九四二)。

問一  a  d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二  A  D に入る言葉として適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上使ってはいけません。

ア そこで イ では ウ でも エ 一方 オ つまり

問三 ——線部①「そうした事情」とは、どういった「事情」を言うのですか、わかりやすく説明しなさい。

問四 ——線部②「自意識を麻痺させようとしている」とありますが、なぜそうするのですか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者とわかり合えないさみしさがあるので、ゲームや動画に熱中しようとするが、それだけでは満足できないから。

イ 現代社会の中では、人間関係の煩わしさやそこからくる苦悩、孤独感から逃れることができず、疲れてしまうから。

ウ いつも誰かといっしょに過ごすことで、他者とわかり合えない現実を受け入れようとするが、うまくいかないから。

エ 自分の内面と常に向き合い、自分の未熟さや不安定さ、孤独感などについて考えるのはつらく、苦しいものだから。

オ 孤独感から逃れるために、SNS上で人と会話をしようとするが、結局は他者との関係性にとらわれてしまうから。

問五 ——線部③について、「個として閉じた形で自分が確立されている気がしない」とありますが、筆者はなぜそのように言うのですか、わかりやすく説明しなさい。

問六 ——線部④、⑤とありますが、それぞれどのような点を「未熟」とみなしているのですか。その違いが明確になるように、それぞれ五十字以内で答えなさい。

問七 ——線部⑥「自分を動かす行動原理がなくなってしまう」のはなぜですか。最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「他者に配慮できる」ことを肯定的にとらえる「間柄の文化」では、誰とも主体的なコミュニケーションができないので、インターネット上の世界に閉じこもり、外の世界へ行動しようとするきっかけが与えられないから。

イ 「他者に配慮できる」ことを肯定的にとらえる「間柄の文化」では、一方的な自己主張は求められず、相手の気持ちや立場といった社会からの期待に応えるために行動するという、他者との関係性が重要視されるから。

ウ 「他者に配慮できる」ことを肯定的にとらえる「間柄の文化」では、本来の自分の意見や立場が誰にも認められず、常に自分の気持ちを隠し他人の心中を推し量ってばかりなので、行動しようとする気持ちが消えてしまうから。

エ 「他者に配慮できる」ことを肯定的にとらえる「間柄の文化」では、親と子の関係性が大切とされるが、現代の社会においては家族のきずなが希薄になってきているので、人々は自分らしい生き方を強要されるから。

オ 「他者に配慮できる」ことを肯定的にとらえる「間柄の文化」では、社会が求める理想的なあり方を人々は押し付けられるので、個人の自由な生き方は抑圧されて、本来の人間的な関係性が生まれてこなくなってしまうから。



三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、表現を変えたところがあります。)(五十点)

始業式の次の日は、学級委員やいろいろな委員、そうじ当番の順を決めることに午前中が使われ、わたしは早く勉強が始まって宿題が出ればいいのと思っていた。

それを休み時間にエリサに話すと、アイは勉強が好きだねえと茶化された。家でやる一つできるからと言うと、アイは一人で何してるのと聞かれた。

「宿題したり、テレビ見たりしてるくらいかな」

「わたしはゲームしてばかりでいつもお母さんにおこられてるよ」

わたしもゲームがあればこの埋まりきらない寂しささびをどうにかできるだろうか。

「あとは自分のアルバムを見返してる」

アルバム？ と聞き返してきたエリサにわたしは何度もうなずいた。

「小さいころからの写真を見返して、なつかしいなーって思ってる」

「親って写真とるの好きだよ。ねえ、うちの玄関げんかんに写真かざってあるの覚えてる？」

エリサの家の玄関にはたくさんの写真立てが置かれている。確かにエリサのお母さんは写真をとるのが好きで、私たちが遊んだり宿題をしている姿も記念にと言ってカメラを **a** カマaえていた。それを思い出しながらわたしはうなずいた。

「その中に家族写真もあるんだけどさ、毎年お兄ちゃんも、わたしも **I** してる」

「どうして？」

「だってきちんと服うしろよこ着て写真屋さんでに連れてかれて、無理やり笑ってーなんて言われるから、どの写真も顔が引きつってるの。こーんな感じ

で」  
エリサは表情を硬直うしろよこさせておどけて見せた。口は横に広げ、目は細く糸いとのようにしている。あまりの変な顔にわたしはお腹なかをかかえて笑

った。

「あんな顔が写真として残るなんて最悪だよ」

「今度遊びに行った時に見てみるよ」

絶対やめてーと、エリサがわたしに後ろからおおいかぶさり脇腹をくすぐるから、今度は涙が出るくらい笑った。

「うちもね、お父さんが単身赴任するまでは毎年とってたの。家の前の桜の下で。でもお父さんもないし、お母さんもないそがしくてもうとらなくなっちゃったんだ」

ひとしきり笑いおわって指先でにじんだ涙をぬぐいながらそう言うと、思い出と共に寂しさがこみ上げてきて最後の方は少ししめっぽくなくなってしまった。

アルバムの中には毎年一枚ずつ家族写真があった。最後にとった桜の下のわたしはぐずってとんでもなくブサイクな顔をしていた。それは三年生の春、確かお父さんが単身赴任で家を出ていく日にとったものだった。寂しくて寂しくてわたしはずっと泣いていた。

「そっかー」

「また同じようにとれたらいいんだけど、難しいかな」

自分の底からわき上がってくる感情に無理やり蓋をするようにヘラツと笑ってみると、①おでこにパチンとはじけるような痛みが走った。イタツと手でおおうと、目の前のエリサが口をへの字にしてこちらを見ていた。

「アイはそうやってすぐ我慢するところあるよね」

ヘツと間のぬけた声を出すと、今度は両頬をばしんとはさまれた。唇が自然と前につき出して、今わたしはすぐくブサイクな顔をしている気がする。

「いそがしいって言っても、写真を一緒にとれないほどいそがしいわけじゃないでしょ？今なんてスマートフォンでパシャツで終わるじゃん。一緒に写真とってもらったら？」

「でもお父さんは福岡だし。お母さん帰ってくるの遅いし、休みも不定期だからみんな写真なんて無理だよ」

「もー！もっとわがまま言えればいいじゃん。いつも我慢してばかりだから写真とってくらいのお願い聞いてもらわなきゃ。三人じゃなく

て、二人でだって立派な思い出だよ」

でしょ？と首をかしげるエリサの眼差しは真剣で、わたしはゆっくりとひとつうなずいた。

帰り道、エリサと別れた後にいつもの桜並木を歩いた。恒例行事だった家族写真がなくなってから、わたしはこの道を歩いて桜を見ると、

II 気持ちにならずにはいられなかった。

たっぷりとした花たちが木々に咲き始めると、楽しくて満たされた、あのころの自分の姿をどこかに探してしまおう。② けれど今は歩く度に靴底に花びらがまとわりつくのをわずらわしいと思ってしまう。

あのころはかわいいピンク色が好きで、小さな花びらが五つ寄り集まってできた一つのお花が風にさらわれて舞う姿は、紙吹雪みたいだと思った。枝の間から木漏れ日がスポットライトになり、スカートをはいで立っているだけで特別な女の子になった気分がした。手をつないだ両親は笑っていて、もつとわたしを笑わせるために、お父さんはセルフタイマーのシャッターを押してこちらに向かって走ってくる時、わざと変な顔をしていた。だから二年生までのわたしは、この道でいつも大きな口を開けて豪快に笑っていたはずなのに。

その日の夜、お腹のすいたわたしは棚の中にあつたカップ麺を食べて先に食事を済ませた。ローテーブルの上にアルバムを置いてお母さんの帰りをじっと待った。

十時を過ぎてもお母さんは帰ってこず、待ちきれず携帯に電話をかけるともう少しだからと言われた。眠たくてまぶたが落ちていきそうになりながらも、思っていることを今日伝えなければ、またわたしは気持ちに蓋をしたままになる気がして、頭がカクンと落ちそうになると思いつきり手の甲をつねった。痛みが走ると少しだけ目が冴えた。

お母さんが帰ってきたのは結局十一時を過ぎたころだった。今日はコンビニの袋は持っていないなくて、帰ってくる途中でおにぎりを食べた。とくたくたに疲れた様子で言った。

「アイが先にご飯食べてくれて助かった」

そう言ってリビングの床に足を投げ、仰向けに寝転がったお母さんのそばに近寄り、少し話があるのと重たい頭をどうにか支えてbツ

た。なあに？と視線がこちらに向くと頭の中で何度もくり返していた言葉が胃のあたりでつまってしまい、<sup>③</sup>無言でアルバムを差し出した。なつかしいね、と言って手にとったお母さんはゴロンとうつぶせに姿勢を変えて、ページをめくっていく。

「どうして急に出してきたの？」

「わたしね、留守番してる時にこのアルバムをよく見てるの」

うなずきながらページはパラパラとめくられていく。写真の中の満面の笑みの自分と目があった。

「お母さんともっと写真がとりたい」

勢いに任せてそう言うのと、<sup>④</sup>わたしの決意の一言とは裏腹にお母さんはキョトンとした顔をしながら、瞳は疲れからかとろんとしていた。

「昔は桜の木の下で家族写真をとってたでしょ。でもお父さんと離れて暮らすようになってから、それがなくなっちゃって。お母さんもいそがしくなって、写真をとる機会も」<sup>c</sup>「へ」っちゃったから」

お母さんの手元からアルバムを取り、一番最後の写真を見せた。それは五年生のクラス写真だけのページだ。

「去年の写真はこれだけ。お母さんがわたしのことないがしろにしているととは思わないけど、携帯でもいいから一緒に写真をとって欲しい。昔みたいに今の家族をちゃんと思いで出して残したいの」

わたしの手からそつとアルバムをぬき取ると、お母さんはしつとりとした声で「ごめんね」と言った。

「お母さんいそがしくて気付いてあげられなくて」

「お父さんもお母さんもお母さんいそがしいのわかってる。だけど写真一枚とるくらいのお父さんが許してもらえてるでしょ？」

「ぜんぜんわがままじゃないよ。いつも我慢させてごめんね」

おいでと言われて、わたしは横になったお母さんの腕の中にすべりこんだ。こんなふうと一緒に横になったのもいつぶりだろう。毎日おやすみなさいのハグをしているけれど、それよりもっと近く、強くお母さんを感じた。ゆつくりと髪をなでられると、それだけで全身の力がふーっとぬけて本当はまだ子供でいたいと、ようやく分かった。赤ちゃんの時にもどったようなやすらぎが全身を満たしていく。

「毎日寂しい？」

わたしは正直にうなずいた。じんわりと涙がにじんで、それをさとられないようにしたけれど、<sup>⑤</sup>ポロポロとあふれ出してきた滴はお母

さんのシャツの胸の部分に吸いこまれるように染みこんでいく。

「ごめんね。アイはまだ十一歳だもんね」

首を横にふると、我慢しなくていいのよ、とわたしの気持ち伝わったかのように、やさしい声が降ってきた。

「写真、とろうね。約束する」

お母さんはゆっくりゆっくりと髪の毛をなでてくれる。こんなに髪の毛のびてたか、と言いながら、ゆっくりゆっくりと、そうされていると髪の毛の先から眠気が全身をツツんで、お母さんの腕の中でまぶたを閉じてしまった。耳元では昔歌ってくれていた童謡がうすばんやりと聞こえた。

翌朝、目が覚めると、わたしはベッドの中にいた。いつものようにリビングに向かうと、お母さんはもう起きてコーヒーを飲んでいる。おはよう。早いね、と言うとコーヒークップから顔をあげた。

「学校に行く前に写真をとろうか」

まだ寝ぼけているのだろうかと思っていると、急いで準備して、と急かされた。

わたしより先にお母さんが起きていること自体がめずらしくて、それだけでもおどろきなのに、ちゃんと昨日の約束を覚えていてくれたことがうれしかった。

⑥ 歯をみがきながら洗面台の鏡に映った自分の顔がゆるんでいて、口の端からあふれた泡がこぼれ落ち、あわてて顔を引きしめた。急ぎながらもいつもよりいいねいに髪をとかして、洋服も一番お気に入りのものを選んだ。お正月にお父さんとお母さんに買ってもらった膝丈の薄いピンク色のスカート。上は白いスウェットを合わせた。

コーヒーを飲むお母さんはまだ眠たそうだったが、わたしのためにあったかい牛乳を用意してくれて、それを飲みながらスナックパンをほおばった。

二人で家を出る時、心臓が高鳴っているのがわかった。どくどくと心臓の音がして、全身を血液がめぐっている感覚。お母さんをつないだ手のひらがじんわりとしめり気を帯びていく。

まるで一年生の入学式みたいだと思いながら、家のすぐそばの川原に立った。

「毎日通ってるけど、二人でくるのは久しぶりだね」

この辺だったかな、と今までとついていた場所を探すお母さんの手を引いて、ここだよと教えた。写真の中で何度も見ていた景色が目の前に広がって、かえって現実感がない。

二人で顔を寄せて、桜が入るようによく動きながらお母さんの携帯で写真をとる。画面に映るわたしたちの顔を見たら、なんだか泣きそうになったけれど、ぐっと堪えて目がなくなるくらい思いっきり笑った。

「お父さんがとってくれたみたいに全身が入るようにとれるかな」

そう提案をすると、お母さんは川原の歩道に立てられた円柱の上に携帯を置いて、画面を確認した。いくよーつと言う掛け声とともにお母さんがこちらに向かって走ってくる。その姿が昔見たお父さんの姿と重なった。お母さんの背後には満開の桜が風にふかれ、わたしに向かつて大きく手をふっているみたいだった。枝の間からもれた朝日がわたしたちにふり注ぎ、やわらかい光に照らされて透けた白桃色の花びらが、くるくるとダンスするように舞っていた。みんなが思わず顔をあげて、きれいだねと言いたくなる気持ちがある。わたしも昔はそうだったのに、卑屈ひくつになってうつむいてばかりいたから、この景色に気がつかなかったのか。

となりに走りこんできたお母さんは息があがっていて、おもわず笑ってしまうと、やめてよーと言われてさらに笑った。それとほぼ同時に携帯からシャッターの音が鳴る。二人で顔を見合わせて、えつ、と固まる。携帯の中に写っていた私たちは、満開の桜を背に向かい合って笑っていた。

「お父さんに送ったら喜んでくれるかな」

「これ、ポストカードにしてお手紙送ろうか」

川原沿いをランドセルを背負った子供たちがちらほらと歩き始めている。もうそろそろ学校にいかなければいけない時間だ。

「じゃあ、学校いってくるね」

「いってらっしゃい」

「いってきます」

⑦ かけ出すと地面に落ちた桜の花びらが風に巻かれてふわりと舞った。わたしの薄いピンクのスカートも、ていねいにとかした髪の毛も、さらりと風がなでていく。

(松井玲奈「家族写真」朝日新聞出版)

問一 a   d  のカタカナを漢字に直しなさい。

問二  I、 II に入る言葉として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- I ア にんまり      イ うんざり      ウ ぼんやり      エ しょんぼり      オ どんより
- II ア 苦い      イ なつかしい      ウ 腹立たしい      エ 楽しい      オ くやしい

問三 —— 線部①で起こったことの説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「エリサ」は、自分のまじめな話を真剣に聞こうとしない「アイ」の態度に意見をしようとして、おでこを指ではじいた。
- イ 「エリサ」は、自分の内面を直視しようとしないう臆病な「アイ」に対し勇気づけようとして、おでこを指ではじいた。
- ウ 「エリサ」は、親に遠慮ばかりしている「アイ」に過度な気づかいは不要だと伝えようとして、おでこを指ではじいた。
- エ 「エリサ」は、自分の感情をコントロールできない「アイ」のふがいなさを注意しようとして、おでこを指ではじいた。
- オ 「エリサ」は、親の愛情の薄さをうらんでいる「アイ」のわがままな態度をたしなめようとして、おでこを指ではじいた。

問四 —— 線部②とありますが、「わたし」はこの時の気持ちを後でどのように戻っていますか。それが述べられている一文を、この後の本文から探し、最初の五字をぬき出しなさい。

問五 —— 線部③で「わたし」が「無言」であった理由を説明しなさい。

問六 —— 線部④で「お母さん」が「キョトン」としていた理由を説明しなさい。

問七 —— 線部⑤とありますが、この時「わたし」はどのようなことを感じていると言えますか、説明しなさい。

問八 — 線部⑥で「わたし」が「顔を引きしめた」時の気持ちの説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が早く起きて写真をとろうとせかすので、浮き足立ってしまったてどう行動すべきかとまどい、とにかくきばきと動こうと思っている。

イ 朝早くから母と写真がとれることに舞い上がってしまい、自然と笑顔になったが、母の気持ちに真剣に応えしつかり準備しようとしている。

ウ 母が写真をとるためにあまりに早く起きていたことにおどろいて、ぼうぜんとしてしまったので、なんとか心を落ち着かせようとしている。

エ 母が思いがけず朝早くから写真をとろうと言い出したことが、夢のようであつとりとしてしまい、夢なら覚めないでほしいと願っている。

オ 写真をとるために早起きをしすぎてしまい、母も自分も寝ぼけてまだぼんやりしているため、早く意識をはっきりさせようと思っている。

問九 — 線部⑦とありますが、この情景描写は物語の結末としてどのようなことを暗示していると言えますか、説明しなさい。